

書評

『文明崩壊－滅亡と存続の命運を分けるもの(上・下)』

J・ダイヤモンド著, 楡井浩一訳, 草思社, 2005年, 437+413p.

田宮 兵衛

I 「著者の紹介」について

著者 J・ダイヤモンドは, UCLA の Department of Geography の教授であるが, 本書は日本では地理書とみなされていない. 本書謝辞中の著者自己紹介が, 訳文では地理学部教授となっている. 表紙カバーの著者紹介では地理学教授となっているので, 地理学の認知度が校正の対象にもなっていないという我国の現実までわかる.

II 構成と形式的内容紹介

本書では, 地球環境問題に関して, 社会はその前提としてあった環境を利用し尽くした段階で崩壊 (collapse) するという仮説に基づいて, 比較的楽観的な展望がなされている. 第2部の, 有名無名・中小・新旧様々な社会の崩壊の描写によって, 社会の滅亡と存続 (fall or succeed) の分岐点を, 考古学的データに基づき分析し, 「崩壊を招く5つの要因」を導出する. その基準でプロローグと第1部を書き, 第3部で現代の社会を論じ, 第4部では「とりわけ深刻な“12の環境問題”」として地球環境問題への展望的概括を行う体裁となっている.

まず, 上下2巻, 437+413頁, 4部・16章にわたる全体の構成を示す. 部題は『 』, ○数字で章番号で表す. 第1部, 第4部は章題を示すが, 第2, 3部については各章の対象事項のみを示した. () は補足情報である. なお, 訳書では第9章以下が下巻となっている.

プロローグ (問題設定)

第1部『現代のモンタナ』①モンタナの天空の下 (詳細な問題設定)

第2部『過去の社会』②イースター島 (東部太平洋), ③ピトケアン島 (同前), ④アナサジ

族 (古代北米先住民), ⑤マヤ南部低地 (古代南米先住民), ⑥～⑧ヴァイキングのグリーンランド植民 (以上崩壊例), ⑨持続例 (ニューギニア, 東部太平洋・ティコピア島, 日本・江戸時代)

第3部『現代の社会』⑩ルワンダ (高人口と植民地分割統治), ⑪ドミニカ共和国・ハイチ (エスパニョーラ島の森林利用対比), ⑫中国 (総合的破壊), ⑬オーストラリア (資源搾取)

第4部『将来に向けて』⑭社会の破滅的決断, ⑮大企業と環境, ⑯世界はひとつの干拓地

本書の建前上のエッセンスである「崩壊を招く5つの要因」と「とりわけ深刻な“12の環境問題”」は, 以下の通りである.

「崩壊を招く5つの要因」

1. 人による環境損傷 (環境脆弱性)
2. 気候変動
3. 敵対的隣近集団の存在
4. 友好的隣近集団の存在
5. 社会的問題解決能力 (制度・価値観)

「とりわけ深刻な“12の環境問題”」

1. 自然の棲息環境の破壊
 2. 漁業資源乱獲
 3. 生物多様性の喪失
 4. 土壌浸食
 5. 化石燃料エネルギーの限界
 6. 飲料水・清浄水の不足
 7. 光合成生産量の限界
 8. 毒性化学物質
 9. 外来種による生態系の破壊
 10. 地球温暖化
 11. 現在の人口増加速度
 12. 人間による環境侵害量の増大
- 以上が最低限の内容紹介である.

III 社会の崩壊とは

本書の圧倒的重心かつ最もおもしろい部分は, 社会の崩壊過程が「考古学的データ」の積み重ねに基づい

て復元・描写される第2部にある。崩壊した社会に残された情報は語義的に考古学的データとなるのである。データに関し特段の説明は無い。しかし、微量化学分析技術や高速・大量情報処理技術の近年の進歩がもたらした情報量の増加が、本論を成立させたことは想像できる。そのような考古学的データに基づいて5つの社会の崩壊が描かれる。

社会の崩壊とは、成立したとみなし得る段階まで成長した社会が成長に失敗し、社会組織が維持できなくなり消滅する事態である。一般的に社会の空間的範囲が限界に達すれば、成長は不可能になる。これは、有限な地球という抽象的な話ではなく、物質・エネルギーおよび情報の輸送・伝達速度がそれらの需要に追いつかない場合に現実となり、社会の崩壊が迫る。この事態を避けるために提唱されている一つの説が持続的成長である。崩壊を可能な限り遅らせるためには、誤差の範囲で一定となる平衡状態または準平衡状態にソフトにランディングさせることが必要である。平衡・準平衡状態が成立しなくなるとは、物理的世界では物質・エネルギー収支が突然成立しなくなること、生物世界では新陳代謝が断たれる事態である。社会においては、さらに情報の途絶も含める必要がある。

訳書は、社会が成長することを前提として、それに失敗した場合を文明崩壊と言うのであるが、原題では collapseするのは society（社会の崩壊）であり、civilizationや cultureではない。文明や社会は崩壊するが、文化は崩壊せずただ滅亡するのみということかもしれない。また、訳書で言う文明・原著では社会の崩壊例において、崩壊するまでの寿命は数百年が想定されている。その長さは結構長い。本書が取り上げる崩壊例についても、アメリカ合衆国建国以来の250年よりもずっと長いと述べられている。人間の一生よりは長いので、社会が成立してから後に生まれ、崩壊する前に死んだ人々は、それを知らずに済む。またいずれ滅びるとしても、社会のスタート時、また成長期に居た人々の大部分はただ普通に生きていただけかもしれない。しかし、滅亡時に立ち会った人々は大変だったであろう。社会の崩壊の描写とは、社会の崩壊ととも

に滅亡していく人々の哀切を客観的情景として復元することである。

本書でなされている作業は、人類という生物のありようを、考古学的データに基づいてリアリティをもって再現するストーリーを展開していくことである。個々の考古学的データを蓄積する仕事と、それらを一定の観点からつなぎ合わせたストーリー作りになる。各ストーリーについて紹介することは、読者の興味を殺ぐことになるので避け、キーワード的に表示するに止める。権力者の虚栄（イースター島）、遠い隣島（ピトケアン島）、灌漑水路の下方浸食（アナサジ族）がもたらす環境破壊の増幅となる。マヤとヴァイキングの崩壊は複雑で複合的要因とでも言わざるを得ない。それぞれの記述を成立させているのは、考古学データの収集に関心のない人々からは驚異としか見えない根気と、それらの集積を広大な時空間にまたがる現象として組み立てる構想力である。データ集積の一端に参加しつつストーリーを組み立てることが出来る人はいるが、よほど小さなテーマでない限りすべてを一人でこなすことは不可能である。これらについては、33頁に及ぶ本書の参考文献は解題に近く、有力な手掛かりとなろう。

学問分野が成立し維持される条件は、関連諸テーマにおいて強力にデータを収集する集団的ポテンシャルと、それらを仕分けして組み立てる構想力の持ち主が共存していることである。いずれか一方が欠ければその学問は崩壊する。

IV 環境決定論

本書は、ベストセラー的売れ行きがあった「銃・病原菌・鉄」（ダイヤモンド 2000）の続編という読みかたができる。著者J・ダイヤモンドは、明瞭な「自然環境決定論（以下「自然」を省略）」者である。前著「銃・病原菌・鉄」は、新人が地球全体に広がる1万3千年間（狩猟採集社会→農耕社会→産業社会）に生じた歴史的・地域的不均衡を対象とした議論であった。本書はその続きである。ただし、前書に比べると、時代が近い分一つ一つの事実関係の描写は深くなってい

るが、それら相互の全体的組み立ては前著ほど滑らかではない。読者を満足させる構成は、時間軸に沿って話を展開させるほうが、空間的構造の記述だけにたよるより、達成は容易であるということであろう。

両書の執筆のモチーフは当然同じであり、本書も所謂「環境決定論」の範疇に入る。しかし、著者は本書中でそうではないことを強調している。なぜ環境決定論者であることが問題になり得るのか？決定論が決定的に成立つのは物理的「決定論」が成り立つ範囲内だけである。現在人類が得ている物理的知識では、およそ宇宙の根源から素粒子まで、また遺伝子についても物理的「決定論」で全過程が説明できる現象は無い。決定的に正しいことは、物理的「決定論」が絶対的に成立する範囲でそれを否定すれば誤りになることである。

すなわち、「決定論」では、自由の範囲が物理的に制限されている状態を決定と言っているにすぎない。物理的「決定論」が論じ得ない非物理的現象には言及すべくもない。

物理的「決定論」が絶対的に成立する範囲以外での自由には様々なレベルがある。例えば、重力に引かれて真空中を落ちていく自由落下の場合、人間は真空中では生きていられないので、宇宙服を着用しているが酸素の補給が途絶えるまでは、自由に瞬きしたりすることができる。大気がある場合、終端速度に達した後一定速度で落下するが、経験を積みば空中姿勢を変えることで重力の方向とはずれて空気中を移動できる。これがスカイダイビングであり、真空中よりずいぶん自由度は増える。しかし、パラシュートが無い限りいずれ地表面に激突して終わる。その程度の自由に価値を認めるかどうかは、それこそ自由である。宇宙服の中で瞬きすることやスカイダイビングの空中滑空に意義を見出すことが自由であることは否定できない。同様に、奴隷搾取の上に成立したギリシア・ローマ市民の自由、発展途上国搾取の上に成立する新自由主義的自由も否定できない。

崖から落ちる間に一生を振り返ることすらできるのであるから、一人の人間が数十年の間に考えることは

既に膨大である。文字記録としてこれまで人類が蓄積してきた情報の量は想像を絶する。また、それらがもたらした思想・科学の途方もない発展はさらに否定できない。しかし、それらは物理的に決定されている範囲の中のことである。同じコンプレックス——科学的リテラシーに欠ける誤用・誤解の山とその上で交わされる議論のすれ違い感——をこの間死んだ小松左京が、純文学に対して抱いていたことを知った(石川 1973)。ジャンルは違うが、小松左京もJ・ダイヤモンドも、作品ないしは論考の面白さで、物理環境と自由の関係の議論に深入りすることを回避している。

本書は「銃・伝染病・鉄」の続編であることは既に述べたが、それより前の時代について考古学的データに基づく人類史がホロビン(2002)にあった。それによると、第四紀人類発生以来、新人が出現する20万年前までは世界中同じレベルの石器しか発見されていない。すなわち、現在考古学的データが得られる範囲は、全域均質でありしたがって地理も歴史もなかったということである。

V おわりに

本書を地理書として訳出すことすらできなかった日本の地理学が崩壊していることは、かねてより指摘してきたことである(田宮 2008, 2010)。要するに、地理書は面白くないということであるが、面白くない原因は既得権に安住できた分迫力に欠けたということと考える。この指摘に際しては、「地理学村」の住民として既得権に安住しながら、地理学の否定的側面を指摘する居心地の悪さあるいは後ろめたさが当然ある。しかしながら、「既得権のために原子力村」の一郭を形成して虚構の学問分野を維持しようとした例がもたらした現実によって、利権の規模は原子力村とは金額にすれば優に10の6乗程度には桁が違うとはいえ、既得権のために虚構の学問分野を維持することは誤りであることが証明された。

【追記】

投稿後、校正中に本書の紹介のような、そうではな

いような記事が朝日新聞に掲載された（1月3日付12版15面、「文明崩壊への警告」インタビュー2012. オピニオン欄）。

文 献

石川喬司 1978. 小松左京の宇宙. 小松左京『果てしなき流れの果てに』解説. 389-411. 早川書房. (該当する小松原文の初出は世界SF文学全集23巻の月報らしいが現物未確認.)

ダイヤモンド, ジャレド著, 倉骨彰訳 2000. 『銃・病原菌・鉄 1万3000年にわたる人類史の謎(上・下)』草思社. Diamond, Jared 1997. *Guns, Germs, and Steel*. W. W. Norton. (2012年2月文庫化)

ダイヤモンド, ジャレド著, 楡井浩一訳 2005. 『文明崩壊滅

亡と存続の命運を分けるもの(上・下)』草思社. Diamond, Jared 2005. *Collapse: How Societies Choose to Fall or Succeed*. Viking Press.

田宮兵衛 2008. 地理学の諸相. お茶の水地理48: 1-7.

田宮兵衛 2010. 地理学における実相と我国における仮相. お茶の水地理50: 92-98.

ホロビン, デイヴィッド著, 金澤泰子訳 2002. 『天災と分裂病の進化論』新潮社. Horrobin, David, 2001. *The Madness of Adam & Eve: How Schizophrenia Shaped Humanity*. Bantam Press.

たみや・ひょうえ

お茶の水女子大学名誉教授